

# Preoperative Threshold for Normalizing Right Ventricular Volume After Transcatheter Closure of Adult Atrial Septal Defect

梅本, 真太郎

<https://hdl.handle.net/2324/4474983>

---

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (医学), 課程博士  
バージョン :  
権利関係 : CC BY NC ND

(別紙様式2)

氏名	梅本 真太郎
論文名	Preoperative Threshold for Normalizing Right Ventricular Volume After Transcatheter Closure of Adult Atrial Septal Defect
論文調査委員	主査 九州大学 教授 塩瀬 明 副査 九州大学 教授 山浦 健 副査 九州大学 教授 石神 康生

### 論文審査の結果の要旨

心房中隔欠損症は先天性心疾患の一種であり、心房間の欠損孔を介して左房から右房へ血流短絡が生じる疾患である。その結果右心系に容量負荷をもたらし、右心室機能の低下を引き起こす疾患である。

近年心房中隔欠損症の中でも二次孔欠損型に対してはカテーテルを用いた欠損孔閉鎖術が施行されている。その治療適応として右心系の拡大が認められることが挙げられている。しかし、欠損孔を閉鎖した後も右心系の拡大が残存する症例も認められ、右心系の拡大が残存する症例においては運動耐容能が低下していることが報告されている。

本研究では九州大学病院にて心房中隔欠損症に対してカテーテル閉鎖術を施行した患者を対象として治療後の右室容量の正常化に関して、治療前の心臓 MRI で計測した右室収縮末期容積係数(RVESVI)が重要であり、また治療前の RVESVI  $75\text{mL}/\text{m}^2$  が治療 1 年後の右室容積の正常化の閾値であることを示した。

以上の実験結果はこの方面の研究に新知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験結果等について説明を求めた。各調査委員より専門的な観点から論文内容およびこれに関連した事項について種々質問を行ったがいずれについても適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格とした。